

# 「地藏菩薩応驗記」における地藏信仰とその影響

清水 邦彦

## 序

日本地藏信仰の初期説話集である今昔物語集卷十七の三十二話の説話<sup>(1)</sup>には、地藏菩薩を機縁とした西方浄土往生思想の話が九話見られる。<sup>(2)</sup>(第二・十・十四・十六・十七・二十三・二十九・三十・三十二話)

其の後、用方、弥よ心を蒞して、地藏菩薩を念じ奉る事限無し。而るに、用方、年漸く傾て、遂に、出家入道しつ。十余年を経て後、身に病有と云へども、苦しむ所無く、心違ずして、西に向て弥陀の念仏を唱へ、地藏の名号を念じて、絶え入りにけり。(第二話)

其の僧、年来、地藏菩薩に仕て、日夜寤寐に念じ奉て、更

に他の勤め无かりけり。(中略)常の言に人に向て語て云く、「我れ、必ず、月の二十四日を以て極楽往生すべし。」と。(中略)誠に、言に違はず、月の二十四日に仏の御前にして、端座して死たれば、疑ひ无き往生也となむ人云ひけり。(第三十話)

これらの話において、地藏菩薩は、仏法の媒介者、とりわけ阿弥陀仏の媒介者として信仰されていると考えられる。

ところが卷十七において、地藏菩薩の背後にあるはずの仏法の記述が希薄で、地藏菩薩の現世利益が主として記されている話が、六話ある。(第四・六・九・十三・十八・二十五話)

不調の男は、地藏の御助に依て、命を生ぬる事を喜て、弥よ心を蒞して地藏に仕けりとなむ語り伝えたるや。(第四話)

このような「阿弥陀仏の媒介者としての地藏菩薩」、「現世利益的地蔵菩薩」は日本独特のものであるうか。本稿では、とりあ

えず今昔物語集卷十七の地藏説話に影響を与えたとされる中国の「地藏菩薩応験記」における地藏菩薩を中心に、日本の地藏信仰を考えてゆきたいと思う。

## 一 經典における地藏菩薩

応験記における地藏菩薩を見る前に、地藏信仰の一流源とも云うべき、地藏十輪經・地藏本願經<sup>3</sup>における地藏菩薩を見てみることにする。十輪經・本願經において地藏菩薩は、切利天において仏如來の威神力を受け、釈迦の死後弥勒如來の出世までの五濁惡世の衆生を（切利）天に救うものとされている。

汝等当知。有菩薩摩訶薩名曰地藏。已於無量無數大劫。五濁惡時無仏世界成熟有情。（十輪經・大正藏第十三卷七二―七三）

隨所在處若諸有情種種希求憂苦逼切。有能至心称念誦歸敬供養地藏菩薩摩訶薩者。一切皆得如法所求離憂苦。隨其所心安置生天涅槃道。（十輪經・同七二四―七三）

此菩薩藏神誓願不可思議。若未來世有善男子善女人。聞是菩薩名字。或讚歎或瞻禮。或称名或供養。乃至彩画刻鏤塑漆形像。是人當得百返生於三十三天永不墮惡道。（本願經・同四一―四二） \*三十三天 切利天

吾於五濁惡世。教化如是剛彊衆生。（中略）令娑婆世界至彌勒出世已來衆生。悉使解脫永離諸苦遇仏授記。（本願經・

同七七九中下）

十輪經・本願經において、彌勒仏との関連を説く具体的な記述はないものの、彌勒出世までの衆生を「天」に導き、仏の授記に会わせる、ということ<sup>4</sup>は明らかに彌勒上生思想との密接な関わりが推測できよう。

## 二 地藏菩薩応験記の意義

地藏菩薩応験記は、宋の僧、常謹が地藏本願經の思想を受けて編集した全三十二話からなる仏教説話集である。（成立九八九年）<sup>5</sup> 収集された説話のうち年代の明確なものを見ると、六五〇年から九八〇年に分散しており、要するに唐代の信仰が採録されている。例えば第一話・第二話の「放光菩薩像」が中国では幅広く信仰されていたことを考えると、<sup>6</sup> 応験記の説話は単に文献上の話ではなく、当時の信仰を記したものである。

先学の研究において日本の地藏信仰の初期説話集、<sup>7</sup> 地藏菩薩靈驗記・今昔物語集卷十七の成立<sup>8</sup> には、<sup>9</sup> 地藏菩薩霊驗記の影響が大として<sup>10</sup> いる。<sup>11</sup> 応験記が日本に伝わった時期は明確ではないが、<sup>12</sup> 日本の仏教文化の受容を考えるに、<sup>13</sup> 応験記に代表される中国の地藏信仰が地藏菩薩霊驗記や今昔の地藏説話に影響を与えたと考えるべきであろう。

## 三 彌勒仏との関係

一で述べたように十輪經・本願經において地藏菩薩は弥勒土生思想と密接に関係があると考えられる。それゆゑ、応驗記には地藏菩薩が弥勒仏の媒介者として兜率天へ衆生を導く話が二話ある。(第四・六話)

吾生第四天上、是地藏菩薩引導令事補處、彼天生人多是大士引導也(第四話)

\* 第四天 兜率天、補處 弥勒仏

汝模写我身既多、永不墮三惡道、捨寿生兜率天、慈尊下生日、当得作仏記(第六話) \* 慈尊 弥勒仏

また兜率天に生まれる待機場所である福舎に地藏菩薩が導く話が一話ある。

依卿恩沢感地藏化、離苦生此處、係問、是何處、曰此處名福舎、寿命長遠離諸患難、生在此中、必偶弥勒三会、盡諸

苦際(第十六話)

さらに兜率天の下に位置する忉利天への衆生を導く話が二話ある。(第十一・十九話) 忉利天は前述の如く、經典における地藏菩薩の救済先であるが、第十九話を見ると、弥勒仏との関連も強く、地藏菩薩は弥勒仏の媒介者であると思われる。

今公為造聖像修追福業、其業已滅、生忉利天、(中略) 天

毎月二十四日一三千化身地藏無量無辺、集会其中、遍滿無憂樹下、説法利天、皆金色沙門、一時為我説法已曰、汝等夫婦得脱、在弥勒成仏時、以此因縁故、来告之、唯善所求、都不起邪心(第十九話)

以上のことを考えると、地藏菩薩が「天」に衆生を導く第十

三・十五・二十・三十一話においても、いままでの話と同様、弥勒仏の媒介者であると言える。

張氏盡母財産、造等身地藏、復見母身帶光明、住立空中、告曰、我依汝造像功德、生天上、汝敬心礼供其像、慈氏菩薩成仏時、同見仏聞法(第十三話) \* 慈氏 弥勒

#### 四 阿弥陀仏との關係

以上のような弥勒仏との結びつきにもかかわらず、応驗記には十輪經・本願經にはみられない阿弥陀仏の脇侍としての地藏菩薩という概念や地藏菩薩の機縁による西方浄土往生思想が見られる。(脇侍—第二十四・二十六話・西方浄土往生思想—第九・十一・二十六話)

左右安置觀音地藏量軀高各七尺五寸、中央安置中尖無量寿

仏像、高一丈六尺(第二十四話)

大原尼智藏、時事地藏菩薩、欣求西方浄土、捨銅錢二百文、

画阿弥陀像、左右脇士、画地藏菩薩二体(中略) 念阿弥陀

觀音勢至名、各一百遍、念地藏名一千遍、合掌向西方卒矣

(第二十六話)

法尚七十八、其年二月二十四日告同伴曰、地藏菩薩来至我房(中略) 菩薩言、此亦随所願、若欲願生浄土、当念阿弥陀仏、一日夜專心念仏、即得往生、聞此聖告、從昨日專念西方仏、只今往生浄土、言已合掌向西方卒、其像在遠、放光照尚身、冷後光西方上去、見者皆謂、地藏菩薩放光、

照送浄土奇瑞也（第十一話）

これらの話において、要するに地藏菩薩は阿弥陀仏の媒介者として機能しているのである<sup>(19)</sup>。

このことについてまず注目すべき点は、阿弥陀仏の脇侍が觀無量經と異なり、觀音地藏（第二十四話）地藏菩薩二体（第二十六話）となっている点である。

このような三尊像が唐代において特殊なものに過ぎなかったかどうか一概に言いがたいのが、地藏が觀音と共に阿弥陀浄土信仰の一部を担っていたことは事実である<sup>(20)</sup>。

それではなぜ十輪經・本願經及び觀無量壽經に記述がないにもかかわらず、地藏菩薩は阿弥陀仏と結び付いたのであろうか。この点について私は三つの点を提示したい。

第一点は十輪經・本願經は前述の如く弥勒出生までの五濁惡世の教えであったため、末法思想の經典と見做された点である。例えば三階教師神昉は新訳十輪經の序文で「十輪經、則此土末法之教也」（大正藏第十三卷七七七上）と書いている。

第二点は地藏菩薩のたとえ罪ある衆生であつても救済するといふ「慈悲無限」<sup>(21)</sup>の性格が阿弥陀仏と共通している点である。

多造無間罪 誹謗於正法 毀聖起惡見  
妄說斷常論 具造十惡業 不畏後世苦

多遠離三乘 臭穢向惡趣 無明蔽其目  
貧嫉多姦矯 云何転仏輪 度此衆生類

（十輪經・同七二八中）

一王發願永度罪苦衆生。未願成仏者則地藏菩薩是。（本願

經・同七八〇下）

第三点は先に引用した史料のごとく、十輪經に唱名による仏法への帰依が示されている故、十輪經が浄土思想の經典と見做された点である<sup>(23)</sup>。（史料：十輪經・同七二四中・前出）

懷感「釈浄土群疑論」

問曰。今浄土業者既行念仏三昧。未知此法定有教。今諸方道俗多生疑惑。將無聖教偽行仏法。誘引凡愚大僧誹謗。請陳至教以除疑網。

釈曰。諸大乘經說此三昧其文極衆。如華嚴經數処皆說念仏三昧。其文極広。故涅槃經・觀仏三昧・賢護・般若三昧・

觀經・鼓音声王・大集月藏分・地藏十輪經・占察經・文殊般若・花首經・大智度論說。（大正藏第四十七卷七三中）

まだまだ課題は多いと思われるが、以上三点の理由から地藏菩薩は阿弥陀仏の脇侍、媒介者となつたと考えられる。

次に注目すべき点は應驗記における兜率天を中心とした天と西方浄土との位置付けである。應驗記の中で天と西方浄土とを比較している記述は二箇所ある。

一つは第九話での寡婦の發言である。これを見ると、天に生まれる場合女身を受ける可能性があるが、西方浄土に生まれる場合は女身を受けず、故に西方浄土の方が自分にとって適している、とある。

母曰、吾厭女身、不樂天樂、若生天上、恐尚受女身、今須願浄土（中略）兩道白光從空而下、覆母身上、暫時昇空、

指西方散去（第九話）

もう一つは第十一話での釈法尚の発言であり、これを見ると、天よりも西方浄土のほうが仏道修行に適している、とある。

地藏菩薩来至我房告曰、汝慈氏如来三会説法中、第二会得道人也、今日捨寿即生初利、我白大士、天上是五欲境界、快樂無比、迷失菩提心、又欲期後仏、時仍長遠、唯往生西方安樂世界（第十一話）

以上二箇所とも天より西方浄土の方が優れていると述べられているわけであるが、全ての話に一貫して天より西方浄土が優れていると考えられていたのだろうか。

前述の如く、地藏菩薩が天へ衆生を導く話が応驗記全三十二話中九話ある。もし西方浄土の優越性が確立していたのであれば、これらの話は存在しなかつたのではなからうか。又もし西方浄土の優越性が確立していたのであれば、第十一話において最初から地藏菩薩は西方浄土に導いていたのではなからうか。

以上のように考えると、西方浄土の優越性は一部にはあったが、さほど明確ではなく、むしろ地藏菩薩が天へ導く話、西方浄土へ導く話が混在していること、及び第十一話において最初天へ導こうとするが、結局西方浄土へ導いていること、の二点から天・西方浄土のどちらにも導く地藏菩薩という信仰、即ち「阿弥陀仏、弥勒仏のどちらの媒介者にもなれる地藏菩薩」という信仰があったと言えよう。

唐代の仏教界の状況について一言付しておけば、教理史において阿弥陀・弥勒優劣論（初）があったものの、阿弥陀・弥勒信仰の融合も依然存在していた。従って「阿弥陀仏・弥勒仏のどちら

の媒介者にもなれる地藏菩薩」という信仰があったことは当然のことである。

## 五 仏法との関係

今まで見てきたのは、弥勒仏もしくは阿弥陀仏の媒介者としての地藏菩薩であったが、応驗記には、具体的に仏如来が登場しない話も多い。

このうち第三・五・八・十・十七・十八・二十一・二十二・二十三・二十八・二十九話については仏法への帰依の一機縁としての地藏菩薩の素晴らしさについて述べられており、それ故これらの話において地藏菩薩は仏法の媒介者として信仰されていたのである。

像放明照家内、良更造等身像、於中取小像捨家為寺、号地藏台、遠近眺望如市、地藏像化利益、此最而已（第十話）

童子自語、吾以爪甲画地藏形、夜夢有沙門交臥言談、汝寿五十、々々々々、如此再三唱、除此己以無修善事、師及相者歎曰、聖力不思議、後童子出家具戒、惠藏法師是也（第二十二話）

此像昔隋国智顛禪師、為救三途衆生苦、所画面也、像放光明、照六道、々中見像及顛、遊三惡趣、説法花経、拔苦与樂、聞此事、復礼拜供養者頗多矣（第二十八話）\*此像||地藏菩薩像

## 六 現世利益的地蔵菩薩

ところが残りの第一・二・七・十四・二十五・二十七・三十・三十二話においては、地蔵菩薩の背後にあるであろう仏法の記述が希薄で、主として地蔵菩薩の現世利益が記されているのである。

例えば第一話の地蔵菩薩像は不可思議な光を發し、船を救い、出産を助けたりするが、その結果人々が仏法に帰依するようになったとは記述されていない。残りの七話についても地蔵菩薩像を画くなり造るなりして病気が治る等の現世利益を得るのみである。

無論このことによって、「地蔵菩薩という現世利益の神」が信仰されていたことが意味されるのではなく、仏教説話である以上、十輪經・本願經の現世利益的側面が強調されたに過ぎず、これらの話においても、地蔵菩薩は仏法の媒介者であると解釈すべきであろう。

例えば第一話の、女人の出産を助けたことについては、本願經の、女人の出産を助けよとの記述と対応する<sup>29)</sup>。

何以故。是產難時。有無數惡鬼及魍魎。精魅欲食。腥血。是我早令。舍宅土地。靈祇。荷護子母。(本願經・同七八五中)

復次地蔵。未來世中有諸國王及婆羅門等。見諸老病及生産婦女。若一念聞具大慈心。布施醫藥。飲食。臥具。使令安樂。臥具福利最不思議。(本願經・同七八六下)

また第二十七・三十二話の「延命」についても、本願經に記

述がある。

是中能塑画乃至金銀銅鉄。作地蔵形像。焼香供養。瞻礼讚歎。是人居處即得十種利益。(中略) 四者現存益寿。(本願經・同七八七上)

しかし經典の現世利益的側面が主として信仰され、またその信仰が採録されたことは、地蔵信仰が仏教と離れたものとなる危険性を胎んでいたのではなからうか。

## 七 応驗記まとめ

以上の論述をまとめると、応驗記の地蔵菩薩は、以上の四つに分類される。

- (1) 弥勒仏の媒介者
- (2) 阿弥陀仏の媒介者
- (3) 仏法それ自体の媒介者
- (4) (仏法の) 媒介者

### 省略

#### Ⅱ 現世利益的地蔵菩薩

応驗記の編者常謹は、地蔵信仰を鼓舞するために応驗記を編集したのであるから、仏教教理に則る必要はなかったのであるが、その結果弥勒仏の媒介者としても、阿弥陀仏の媒介者としても、仏法それ自体の媒介者としても信仰される地蔵菩薩が応驗記のなかで展開したのである。

こうした地蔵菩薩の、一種「あいまいな」性格が地蔵信仰の

広まりに貢献したと考えられるが、前述の如く、地藏信仰が仏教と離れたものとなる危険性を胎んでいたのではなからうか。

## 八 今昔物語集への影響

さて最後に今昔物語集との関連に触れてみると、今昔卷十七の地藏説話は、

- ・ 阿弥陀仏の媒介者（第二・十・十四・十六・十七・二十  
三・二十九・三十・三十二話）
- ・ 仏法それ自体の媒介者（第一・三・五・七・八・十一・十  
二・十五・十九・二十・二十一・二十二・二十四・二十  
六・二十七・二十八・三十一話）
- ・（仏法の）媒介者Ⅱ現世利益的地蔵菩薩（第四・六・九・十  
三・十八・二十五話）

の話からなっており、応驗記の分類とはほぼ一致している故、中国の地藏信仰からの影響が推測される。

しかしながら今昔には、「弥勒仏の媒介者」の話、及び生天思想の話がない。そもそも十輪經・本願經において地藏菩薩は衆生を天に救う存在であり、又弥勒上生思想と関連していた筈である。にもかかわらず、なぜ、今昔には弥勒仏と関連した話及び生天思想の話がないのであろうか。

速水侑氏によれば、今昔物語集に収められている弥勒信仰説話は「日本靈異記」・「法華験記」からの引用が大部分で「法

華験記」編述（一〇四〇）以後、今昔成立（一一〇六一一一〇七）までに形成された可能性のある弥勒上生信仰説話はほとんどなく、故に速水氏は「法華験記」が完成した長久年間以後、『今昔物語』が編された嘉承年間までの六十余年間、民間では、弥勒上生信仰説話のあらたな形成と流布がほとんど行なわれなかったことを、示しているのではあるまいか」としている。従って今昔卷十七において地藏菩薩が弥勒仏と関連した話及び生天思想の話がないのは、弥勒上生信仰が当時衰退していたからと考えられよう。

## 九 結び

以上のことを考えると、今昔卷十七の「阿弥陀仏の媒介者としての地藏菩薩」、「現世利益的地蔵菩薩」は応驗記に代表される中国の地藏信仰の影響を受けているが、弥勒上生思想との関連が今昔卷十七のような説話集で見られないことは、日本独特の特徴と言える。

無論、日本において地藏菩薩と弥勒仏との関係が一切ない、というわけではない。例えば奈良十輪院には、釈迦・地藏・弥勒という三尊像（鎌倉期制作）があり、望月信成氏によれば、過去仏―現在仏―未来仏 を表しているという<sup>33</sup>。しかし弥勒上生思想が今昔卷十七のような地藏説話集にないことは日本の地藏信仰を考えるに察し考慮しなければならない点であろう。

註

(1) 卷十七全五十話のうち第一話から第三十二話。なお、今昔の中には地藏に関する話は他に卷六第三十二話・卷十三第十五話がある。

(2) 「念仏」(第二十二話)・「浄土」(第八・三十一話)とのみ記されている話はとりあえず除外した。

(3) この二經に占察善惡業報經を加えて、地藏三經と称される。しかし、占察善惡業報經は地藏信仰に影響をほとんど及ぼしていない。十輪經・本願經とも大乘經典の中でも新しく成立した經典であり、本願經には、中国選述說・コータン選述說がある。詳しくは以下の論文参照。松本文三郎「地藏三經に就いて」『無尽燈』二十一卷一号 大正五年・中村元「大乘經典の成立年代」宮本正尊編『大乘仏教の成立史的研究』三省堂 昭和二十九年・西義雄「地藏菩薩の源流思想の研究」西義雄編『大乘菩薩道の研究』平樂寺書店 昭和四十三年・『仏書解説大辞典』別巻仏典総論

(4) 初利天は兜率天の下部に位置する。

(5) 毛利久氏によると、地藏菩薩像が半跏像の形をとるのは、こうした經典における弥勒仏と地藏菩薩の結び付きによる、という説があるという。毛利久「地藏菩薩の形相」『仏教芸術』九十七号 昭和四十九年

(6) 序文に本願經の引用がある。

(7) 速水侑「日本古代貴族社会における地藏信仰」桜井徳太郎

編『地藏信仰』雄山閣 昭和五十八年 一二一頁註(十二)

(8) 松本栄一「敦煌画拾遺(二)」『仏教芸術』二十八号 昭和五十三年

(9) (1) 参照・卷十七の地藏説話は地藏菩薩靈驗記を基にしていと考えられるが、卷十七の基になった靈驗記は散佚し、今に伝わらない。

(10) 先学では通例、異本の題である「地藏菩薩像靈驗記」(統藏驗所収)が使われることが多いが、私は「地藏菩薩應驗記」が原題であると推定している。詳しくは拙稿「地藏菩薩應驗記」の基礎的研究」『日本文化研究』第三号 掲載予定 参照

(11) 片寄正義『今昔物語集論』三省堂 昭和十八年 四六〇頁・真鍋広済『地藏菩薩の研究』三密堂 昭和三十五年 一五八頁 等。

(12) 私の知る限り、梅津次郎氏の発見した写本の原本が一一四八年に写されたのが最初であるが、これでは地藏菩薩靈驗記はおろか、今昔物語集の成立後となってしまう。應驗記が日本に伝わった時期について、今後の課題である。

(13) 片寄『今昔物語集論』前掲 四六〇頁

(14) 異本地蔵菩薩像靈驗記(統藏經所収)では第十八話にあたる。

(15) 異本地蔵菩薩像靈驗記では「至」。

(16) 異本地蔵菩薩像靈驗記では「一三千世界」。

(17) 敦煌出土の「仏説地藏菩薩經」(大正藏第八十五卷)には

- 地蔵菩薩による西方往生が記されている。しかし、この「仏説地蔵菩薩經」は通例中国選述とされており、応驗記と同じく、中国の地蔵信仰の史料である。真鍋『地蔵菩薩の研究』前掲 一三六頁・柴田泰「中国浄土教の發展」『講座・大乘仏教5—浄土思想』春秋社 昭和六十年 一二二頁
- (18) 異本地蔵菩薩像靈驗記では「地蔵觀音一体」。
- (19) 「阿弥陀仏の脇侍」Ⅱ「阿弥陀仏の媒介者」については、觀無量壽經下品往生參照。
- (20) 塚本善隆『支那仏教史研究・北魏篇』弘文堂 昭和十七年 五九三頁・小西瑛子「地蔵菩薩靈驗記」について 元興寺仏教資料研究所年報『仏教民俗』第五冊 昭和四十七年
- (21) 和歌森太郎「地蔵信仰について」桜井編『地蔵信仰』前掲 四九頁〜五十頁
- (22) 塚本『支那仏教史研究・北魏篇』前掲 五九二頁
- (23) 柴田泰「中国浄土教の發展」『講座・大乘仏教5—浄土思想』前掲 二二五頁及び二四九頁
- (24) 応驗記の中には単に「浄土」と記されている話が二話（第五・十四話）あるが、本論文では「西方浄土」と分かる話から論を進める。（2）參照
- (25) 阿弥陀仏の第三十五願を受けていると思われる。
- (26) 異本地蔵菩薩像靈驗記では「西方浄利」。
- (27) 速水侑『弥勒信仰』評論社 昭和四十六年 二十五頁〜二十七頁
- (28) 平川彰「浄土思想の成立」『講座・大乘仏教5—浄土思想』
- 前掲 十五頁
- (29) ただし本願經で簡条書きで述べられている地蔵菩薩の功德（大正藏第十三卷七八七上中・七八九下）の中に「女人安産」はない。「女人安産」が簡条書きの項目で述べられるのは、日本選述（平安末頃成立か）「延命地蔵菩薩經」である。（国訳一切經・大集部五 二九五頁・正しくは「女人安産」）
- (30) 速水侑『弥勒信仰』前掲 一三六頁〜一三七頁
- (31) ただし、速水氏は弥勒下生信仰の話を一例前掲書一三七頁以下に挙げている。
- (32) (30)に同じ。
- (33) 望月信成『地蔵菩薩』学生社 平成元年 一四九頁〜一五〇頁
- \*引用にあたって旧字体は新字体に改めた。「地蔵菩薩心驗記」は梅津次郎氏が大和文化研究百一号 昭和四十一年 に活字化したものを使用。但し異本地蔵菩薩像靈驗記（続藏經所収）を随時參照し、注意すべき点は註をつけた。今昔物語集は古典文学大系本を使用、又漢文体の部分は書き下し文に改めた。
- （しみず・くにひこ 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中）